

『沖縄芸術の科学』第33号別刷

【研究ノート】

沖縄の人々にとっての“着るもの”とは
—沖縄の衣生活についての小論

大竹有子

2021年3月

【研究ノート】

沖縄の人々にとっての“わたしたちの着るもの”とは—沖縄の衣生活についての試論

大竹 有子

Okinawan Clothing Through the Ages

Yuko OOTAKE

Okinawa is known as a culture of rich and diverse dyeing and weaving. But today, traditional Okinawan dyeing and weaving is used mostly for making kimonos and miscellaneous goods, rather than being used for Okinawan(Ryukyuan)traditional clothing. Okinawan traditional clothing is now far from the daily wear of Okinawan people. The present article focuses on this issue and analysis the changes that have taken place in Okinawan clothing in daily life.

This paper presents a viewpoint comparing the clothing lifestyle of modern day Okinawa with that of other areas in Asia. Today western style clothes are worn by people all over the world; this is one of the results of modern colonialism and globalization. This also holds true for the clothing lifestyles of Okinawa.

はじめに

生活に必要なものを総称して衣・食・住というが、これらは不可欠でありながら卑近にすぎ、熟考するまで気づかない部分も多い。筆者の個人的な感覚ではあるが、食は人間関係や命など、「つなぐ」役割をする。それに対して、衣は「あらわす」役割が大きい。表すものは、時代や地域であったり、個人のアイデンティティやエスニシティ、ジェンダーなどであったりする。関心がないならそれなりに、関心がないということを表している。繰り返しになるが、これは個人の所感であって、服飾論における衣服の起源は、身体保護・装飾本能・呪術・特殊性などが指摘されている [増田 2010 : p1 - 6]。

衣生活において、「あらわす」機能がより強いのは、民族衣装や伝統衣装と呼ばれる衣であろう。これらの衣装の説明には、賛美する言葉やナショナリズムを感じさせる表現が付されることも多い。例えば着物について「和の心」「日本ならではの美しさ」などといった表現である。一方でそれに対する違和感が指摘されることもまた多い。

この小論はタイトルに“着るもの”という用語を用いているが、理由は和服や洋服などの服飾の形式に影響されない用語を用いるためである。「着物」という語は「着るもの」の意味ではあるが、一般的に和服を指すことが多いし、単純に「服」といえば洋服を指す場合が多い。ここでは、“着るもの”の他に、「衣生活」「衣装」「衣」などの語を、適宜用いることにする。また、沖縄のいわゆる伝統的な衣服については「琉服」、服飾や着付けについては「琉装」の語を基本的に用い、沖縄語の語彙も適宜用いる。

沖縄の近代以降と時代を区切り、衣生活という語でまとめてはいても、先述のような差異を視野に入れたうえで集大成するのは一大事業である。本稿ではひとまず沖縄本島地域の女性についての事象を中心とする。理由は筆者の関心のほか、記録や言及が比較的多いためであるので、これに当てはまらない条件の事例も適宜用いることとしたい。また、他の地域についても、特記しない限り成人女性の衣装を対象とする。

本稿では、いわゆる「伝統衣装」「民族衣装」について、沖縄の事例を中心に考えるというスタンスをとりたい。「伝統衣装」「民族衣装」は（類似の用語も含めて）、そのものに定義やその検証を要する語彙である。「伝統」が近代以降の政治的・経済的目論見による創造の産物であることは、ボブズボウムとレンジャーの提起¹以来、常識となっている。「民族」についても、エスニシティやナショナリズムに直結する。こうした問題を念頭に置いた上で、ここではこれらの議論は先行や現行の議論に任せることにして、「伝統衣装」「民族衣装」を「コロニアリズム・グローバリズムによって洋服が浸透する以前の服装」と定義しておく。

1. 現代の沖縄と琉装

沖縄の「民族衣装」とは、どのような衣装をさすのだろうか、と問われれば、

琉装（衣装の形式・着付け方法を共に含む）をあげることができよう。しかし、沖縄が日本の一つの県である現在、「民族衣装」という呼称は広くは用いられない。また琉装は、現在は日常着の地位を失っている。では「実際の日常的な衣料」、「民俗的な象徴としての衣装」などを含む、現在のウチナンチュ（沖縄県出身者、在住者、沖縄にアイデンティティを持つ人々）が最も親近感の持てる“着るもの”とは何であろうか。

筆者は主に古謡や『おもろさうし』において言語で表現された物質文化に注目している。衣生活に関わる表現はその重要な一部分であり、個人的に特に関心が深い領域である。古謡の表現者たちの衣生活は、現在の沖縄のそれとは異なることは言をまたない。しかし、かつての世界観を確認する意味は認められようし、現在に通じる部分も存在するであろう。そのためにも、近代から現在に至る衣生活について確認しておくことは不可欠である。こうした記述は、県市町村史や女性史などに散見される。個々の記述は重要であるが、衣生活という視点で集大成された成果は見当たらない。

1 - 1. 「琉装」とはなにか

次の一編は、『おもろさうし』の中でも特に人口に膾炙しているオモロであろう。

- 一 知花 おわる
目眉清ら按司の
- 又 知花 おわる
齒口清ら按司の
- 又 御鉢巻
手強く巻き しまわちへ
- 又 白掛け御衣
重^{かさ}べ御衣 しまわちへ
- 又 十重きき帯
廻^{まや}し 引き締^ひめて
- 又 大刀よ
掛け差し しまわちへ
- 又 腰刀よ

- 厳さ差し しよわちへ
 又 ひぎや皮さば
 うちおけくみ しよわちへ
 又 馬曳きの
 御駄曳きの小太郎
 又 真白馬に
 金鞍 掛けて
 又 前鞍に
てだの形 描ちへ
 又 後鞍に 月の形 描ちへ

[卷 14 - 986] (外間 [校注] 岩波文庫本、傍線は筆者による)

このオモロには、知花の若い按司の凛々しい姿が、服装や持ち物を詳述することで表されている。“着るもの”に限定すれば、頭に鉢巻きを締め、白色の衣装を重ね着して、帯を締めていると描写されている。

沖縄の歴史に登場する「伝統的」な衣装、つまり和服や洋服が普及する以前の衣装を指す語彙に「琉装」がある。『沖縄大百科事典』（沖縄タイムス社、1983年）では「琉装」の項を立て、「王府時代の成人男女の装束。沖縄（ウチナー）スガイとよぶ」（項目執筆・真栄平房敬）と定義している。「スガイ sugai」とは「装い。服装。身なり」（国立国語研究所 [編] 『沖縄語辞典』大蔵省印刷局、1998年）の意であるから、王府時代にあっても階層・地域・年齢・性別・用途による相違はあるが、すべてが同時代の「スガイ」といえよう。

現在は祭祀・芸能・イベントなどの場に目にする機会があるが、女性が上前を腰ひもに挟むことで帯を用いずに着付



図版（1）金城安太郎 [画] 「聞得大君の御新下り」。カラジを結び、ドウジン・カカンに打掛を重ねた神女の装束が描かれている。（佐久間繁 [編] 『カラー 沖縄の伝説と民話』月刊沖縄社、1973年、表紙）

ける「ウシンチー」や、ゆったりした上衣にスカート状の下衣を合わせる「ドゥジン（胴衣）」・「カカン（下裳）」が代表的といえようか。

素人が一見すると和服に似ている部分が多いように感じるが、縫製や着付けは異なる点が多く、異なる衣文化とするべきであろう。この「琉装」「ウチナースガイ」という語の詳細な起源や用例の検討は、今後の課題の一つである。

まとまった先行研究としては、服飾の面からは植木ちか子氏[植木ほか 2010]、熊谷フサ子氏[熊谷 2014；2020]の成果、また[「あざみ屋・ミンサー記念事業」委員会 2009]のように工芸品をめぐる歴史・民俗など多角的な分野からの研究などがある。

1 - 2. 近代沖縄をめぐる状況と琉装

沖縄において近代から現代にいたる時代の衣生活の変化において、二つのとりわけ大きな転換点は、日本化（皇民化）政策・教育の一部としての衣服改良運動、もう一つは戦争である。

近代以前にも、他地域との交流を通じて、一部にせよ他地域の衣文化の影響はあったが、琉球国から沖縄県になって以降、琉装ではない衣文化がそれまででない勢いで流入してきた。その実情は、市町村史や女性史の聞き書きに散見される。例えば、植木・寺田・片岡[2010]、堀場[1990]、宮城[1972]、聞き書きとしては上原[1984]などがある。服飾や衣生活に照準を当てた内容でなくても、服装についての短い記述や、ことに添付の写真はすべて資料になるといってよい。

琉球国が沖縄県となった直後は、人々の衣生活は急激に変わったわけではない。廃藩置県から1900年頃までは「旧慣温存」政策もあって近世の様式が継続してきた。しかし政治や教育の場で、沖縄のものは時代遅れで前近代的であるというイメージが植え付けられていった。着るものどころか、くしゃみまで他府県の通りにしようという太田朝敷の有名な発言がなされたのは1900年である。

衣生活も当然その影響を受けた。諸々の記述を総合すると、琉装から和装への転換点は1897（明治30）年ごろであった。この時期の教育関係の機関紙に、髪型や服装を日本式にするようにという趣旨の記事が掲載されるようになったという[植木 2010、p 20]。宮城文『八重山生活誌』には、古来の衣装の他に明治以降の男女学生の衣服についても詳述されているが、ここでも同様の記述がみえる

[宮城:1972、p 91～140]。同書に収載されている学校や会合の集合写真をみると、明治30年前後は琉装が優勢または和装が混じり、昭和に入ると和装が優勢になって洋服も浸透していく過程がみえる。

伊波晋猷は「女子の和装の流行し出したのは、日露戦争後であるが」[伊波2000:1943、p290]と述べている。日露戦争が終結したのは1905(明治38)年であるから、和装を奨励する動きは1890年代の終わりごろから盛んになり、徐々に効果を上げていったというべきであろう。これについては堀場清子氏の「さやうなら琉装・琉髪」[堀場1990に収載]が比較的まとまっており、聞き書きを交えて実感も込められている。

ところで、筆者は夏に名古屋でウシンチー姿で外出する。近年の真夏の猛暑に、ウシンチーは実に快適である。冷房が効いた建物内では、かえって肌寒く感じるほどである。高温多湿な沖縄の気候において、琉装がいかに合理的な服装であるかを実感できる。

今から100年ほど前の沖縄は、現在の名古屋の真夏より過ごしやすかったかもしれないが、しかし沖縄の夏に和服の着心地は相当に悪かったのではないかと想像する。伊波晋猷も「あんな常夏の国で朝から晩まで汗だくになって喘いでいるのは、災難というのほかはない」[伊波2000:1943、p290]と述べているが、堀場の記述によれば、着用者が求めるのは快適さのみではない。

近代に限ったことではないが、衣服の差異は他者との差異を示し、社会的地位を表す。和服を着用することは高学歴や本土への出稼ぎ経験を示すことになり、「和装と琉装の間に(略)厳しい階層分化があった」[堀場1990、p152]。衣生活の記憶は個人の感覚に帰結するものであり、人によって、同じ現象が全く異なる意味を与えられることが多い。同時代に和服に付与された意味合いは、琉球国の終焉や階層の誇示以外にも、新奇な服装への好奇心もあったであろう。和服で写真におさまる女性たちの内心には、そうしたさまざまな感情を見て取れるように思われる。

この傾向は大正時代を経て昭和に入り、日本全体が戦時体制に組み込まれていくにしたがって強化されていった。**2-1**において後述するが、大正から昭和の戦前は着物文化の爛熟期である。経済などの格差はあるが、沖縄でも和服に関しては、日本の他の地域と大差はなかったであろう。

昭和に入り、日中戦争に突入した時期から、女性たちの生活も大きく変化した。

戦時体制に組み込まれることになったのである。和服の長い袂やはだけやすい裾、身体を締め付ける帯は、戦時下の生活や労働には適さないという指摘が、政治家・軍人・教育者から発せられた。太平洋戦争が勃発した1941年からはこの傾向が本格化し、日本全国で「非常時女子服」と呼ばれた二部式の着衣、下衣はもんぺが強要された。沖縄でも“お国”のため、天皇のために死ぬことを刷り込まれた皇民化政策・教育のもとでは、それにふさわしくないとされた琉装はもつてのほかという風潮だったであろう。他の都道府県と同じく国防婦人会が結成され、「琉球装全廃運動」として改めて琉装をやめてモンペに上衣とすることが奨励され、結髪のためのジーファーを物資として献納することが「かんざし報国」として華々しく報道された[堀場1990：p 179]。

一方で、沖縄戦の記録映像や写真などでは、琉装とみえる格好の人たちも散見される。一般の民間人を巻き込んだ地上戦では、とるものもとりあえず避難して戦場を右往左往することになったのであるから、着るものを選ぶ余裕などはなく、物資も欠乏していた時代であるから、手持ちの着慣れた衣服だったのであろう。

凄惨をきわめた戦争が終結し、しばらくは同様の時代が続いた。こうした戦中戦後の苛烈な物資不足については、体験された事実からすればほんの一部ではないのであるが、膨大な証言が残る。そして、沖縄の女性たちが本格的に琉装に帰帰することはなく、他府県と同様に衣生活の主役は洋服に移っていった。

着の身着のまま避難した服装のまま、あるいは米軍の払い下げ品など、着用し耐えるものは何でも使いざるをえなかったのが実情であろう。ただ洋服への移行の要因は、ひっ迫した状況のみではなかった。その一つとして、戦争未亡人の生活を支えたのが洋裁であったという事実である。他府県でも同様の状況がみられたが、沖縄における詳細は、粟国恭子氏が詳細に調査されている²。

また、時代は下るが、「かりゆしウエア」の普及も一因であろう。「かりゆしウエア」の起源は1970年で、観光PRが発端であるが、1990年代から官公庁やビジネスシーンでの着用が広まった。現在では広く着用されているように見受けられる。機能的で洗濯がしやすい洋服形式の「かりゆしウエア」は、沖縄のみならず現在の日本においても定着しやすい要素が多かったのではないだろうか。

衣生活の変化は、当初は官吏や勤め人などの男性たちが、ついで教育現場で生徒や学生、そして風俗改良運動や戦時体制によって女性たちが、琉装から和装や

洋装に移っていった、という経過をたどった。

この過程を詳細に分析することが、現在の筆者の最大の関心のひとつである。想定される方法としては、近現代の写真資料を網羅して、琉装・和装・洋装の割合を一覧表とすることである。特定の学校の集合写真を年代順に追うことで、明確な通時的事例があげられるであろう。また、市町村史や当時の回顧録を総合して一覧表とすること、記憶や聞き覚えがある人物に聞き書きをする作業も必要である。

もちろん、実際の変化の過程はこのように単純明快だったのではないし、それに対する人々の感情も様々で、複雑にからみあっていた。風俗史の一面として整理すると同時に、できるだけ多くの個人の記憶を記録したいと考えている。

1 - 3. 現代の琉装

紅型・緋・花織など沖縄の染織については知名度が高く、特に民藝運動以降、研究も盛んに行われている。しかし現在の沖縄の染織品の大部分は、着物や帯といった和服か、小間物やインテリアなどの製品となる。琉装が一般的日常着でない以上、琉服の形で着用される事例は、はるかに少ないであろう。

先に引用した『沖縄大百科事典』において、「琉装」の項の執筆者である真栄平氏は、「現在、美容界や芸能界でみる琉装のなかには（略）琉装とはいえないものがあり（略）違っているのがある」と、執筆当時の「琉装」の仕立てや髪型に違和感を示している。

この指摘は、琉装が日常着の地位を失っていった過程に重なることであろう。『沖縄大百科事典』が編集されていたのは1970年代であろうが、同時代の人々は、年齢層によっては琉装が日常着であった時代を知ってはいるが、もはや過去となっている時期である。芸能などにみる琉装は懐古の対象となりうるが、鑑賞に堪えるための創意工夫が加えられているであろうから、日常着の復元ではない。「違っている」のは必然の現象であろう。

前述したように、筆者にはウシンチーで着用している夏着物がある。那覇市の平和通りにある琉球絣を販売する店舗で購入した、リサイクルの麻の琉球絣である。この着物は和服ではなく、戦後のもので、舞踊衣装かもしれないとのことであるが、袖口こそ広袖であるものの他の部分は和服の形式である。真栄平氏が「違っている」と指摘される事例のひとつであろう。

現在、琉装を日常着としている人は、いなくはないが少数派である。そのひとりである知念ウシ氏は、自身の研究・考察の表現の一部としてウシンチー、ドゥジン・カカン、ジーファーといった琉装を採用されている³。また真喜志きさ子氏も、講演会などに琉装で登場される。筆者もその姿を拝見した。真喜志氏の場合のご母堂が乙姫劇団の上間初枝氏であり、幼少時からなじみやすい環境であったことも理由のひとつであろう。しかし、こうした事例は指を折って数える程度である。舞踊家をはじめ伝統芸能の実演家も、琉装するのは主に舞台衣装としてであって、稽古や舞台の正装としては和装が中心である。

ちなみに、愛知県豊田市在住の舞踊家・水野桃子氏のご教示によると、以前は舞台衣装以外は和装一辺倒であったが、最近は本番当日のちょっとした挨拶程度ならウシンチーの場合もある、という。後述する、琉装を見直す動きの影響であるかもしれないが、詳細な聞き取りは今後の課題である。

筆者が県立芸大に在学して首里に在住していた2000年代、芸大の構内においても日常着としての琉装を見聞したことはなかった。琉装は芸能・行事・祭祀におけるものであった。芸大の付近でよく目にするのは観光客向けの記念撮影用の琉装である。愛知県犬山市の野外民族博物館リトルワールドでも、民族衣装試着体験のひとつとして沖縄の衣装を準備している。

このような場合に提示されるのは芸能の衣装またはそのアレンジである場合が多く、間違いではないが日常着ではない。着用体験をする客の多くは正確な考証ではなく、記念となる写真の見栄えを第一に望んでいるのであろう。筆者個人としては、民族衣装をめぐる事象のひとつとして興味深く観察していきたいと考えている。

一方で、かつての日常着としての琉装を見直そうという動きも散見される。琉縫い・和裁士の熊谷フサ子氏は、自らの学院で技能を教授する



図版(2) リトルワールドの民族衣装試着体験

ほか、琉服の縫製を説明する書籍を出版されている。書籍では独学でも琉服を縫製できるよう図版を多用して解説し、必要に応じて質問も受け付けるという。また和服の着尺やリサイクル着物から琉服を縫製することが勧められている。つまり、和服を琉服にリサイクルしたいという需要がある、ということである。

洋服感覚で琉服をまとうことを提案する動きもある。民具のセレクトショップを営む古川順子氏は、女性用の衣装のひとつドゥジンをアレンジしたカジュアルなドゥジンを販売し、また手縫いするワークショップを開催されている。

東京都出身で、現在は読谷村で沖縄の手仕事を中心に扱う『りゅう』の店主である古川氏は、ドゥジンについて「(知ったときに)これは絶対広めないといけなと思った」という。「昔の服なのに古臭さを感じない。こんなに恰好いいものなだから、格好よく次の世代へ伝えたいじゃないですか」⁴と感じている。現在は展示販売会を開いたり、雑誌の取材を受けたりして、好意的な態度で受け入れられつつあるように感じられる⁵。

宮古島在住の染織作家で工房 Timpab を主宰する石嶺香織氏は、自ら染織作品を制作するのみならず、自身の染織や骨董の宮古上布などを用いた衣服や小物を製作している。衣服は独自のデザインの洋服が主であるが、縫製を外注する場合もあり、琉縫い作家に発注して琉服を製作されたこともある。



図版(3)ドゥジンを着る古川順子氏:
『Limn(沖縄 暮らしの雑記[リム])』
2018年1月号、kilo 発行、p28



図版(4)工房 Timpab 制作のウッチャキ、筆者蔵

筆者は石嶺氏がアンティークの近江上布を解いて、琉縫い作家の砂川恵子氏が縫製したウッチャキ（打掛け）を所蔵している。基本的な形式は古い琉服に忠実であるが、襟に刺繍をほどこし（京都在住の刺繍作家による）、裾にはスリットがあるなど、独自の工夫が施されている（図版（4））。

上記の古川氏や石嶺氏のような事例をみていると、琉装も日常着の領域において絶滅しているわけではなく、現在は息を吹き返しつつある時期だという印象を受ける。

民族衣装はアイデンティティやエスニシティとともに、エコやスピリチュアリティとも親和性がある。つねに政治や軍事に翻弄され、疲弊しつつける沖縄の、抵抗と矜持のひとつの表れとも感じられるのは、筆者がうがちすぎなのだろうか。

2. 「着物」の成立と現在

前章では琉装・琉服と対照させる目的で「和服」「和装」の語を用いたが、本章ではより一般的な表現である「着物」を主に用いることにする。

2020年は美術館の展示で着物に関連するものが目立った。東京国立博物館の特別展「きもの KIMONO FASHIONING IDENTITIES 展」をはじめ、名古屋市博物館の特別展「模様を着る」、京都文化博物館の特別展「舞妓モダン」などである。イギリスのヴィクトリア&アルバート美術館でも「KIMONO : Kyoto to Catwalk」が開催された。

着物の歴史は、近代において沖縄の状況に重なる部分もあるが、現在の状況はずいぶん異なっている。日常生活からほぼ消えた琉装に対し、着物は純粋な愛好者が一定数存在し、彼らを対象とした定期刊行物が複数存在する点で、曲がりなりにも持ちこたえていると感じられるからである。

2-1. 「着物」の近代

ファッションとして和服＝着物を選ぶ人々の多くは、着物で外出しはじめた当初は他人の視線が気になる。そうした体験談として「着物警察」と呼ばれる人々に遭遇することが語られる（筆者も着物愛好者の一人であり、似た現象を体験している）。

「着物警察」とは、着物を着ている人（若年の女性が多い）に突然声をかけ、着付けや着物にアドバイスをする人々（年配の女性が多い）を指す。基本的には親切心からと思われるが、着付けや着物の選択、着物と帯のコーディネートなど

について、高圧的な態度で断定的な評価を押し付ける場合も多い。この現象が着物文化の衰退を加速させるという意見も多い⁶。

着物に限らず、衣生活の歴史はさまざまな変遷を経るものである。時代や地域における好みの傾向はあるが、「伝統」や「正しさ」は主観である場合が多い。「着物警察」が主張する「正しい着物」「正しい着付け」は、実際のところは戦後になって確立された概念である。

現在の和服の形式が成立したのは中世末から近世にかけてのことである。それまで下着であった小袖が表着となった。江戸期に入ると「寛文小袖」（1658～1673年頃）、それに続く「慶長小袖」のような特徴的なデザインによる流行が起こった。また帯の幅が広がり、振袖が登場するなど現在の着物の形式が確立していった。友禅染め、西陣の唐織など様々な染織技術の成立もみた。

近代、大正時代から戦前にかけては染織技術の面でも服飾の面においても爛熟期を迎えた。明治末期には銘仙の技術が成立し、絹織物が大衆の手に届きやすくなった。また合成染料の実用化、アール・ヌーヴォーやアール・デコといった西洋のデザインを積極的に取り入れ、着物は飛躍的に華やかになった。現在、アンティーク着物と呼ばれてコレクターが存在するのは、この時期の着物が多い。

戦争は、ほかの生活文化と同様、着物においても転換点となった。物資欠乏と戦時体制により、豪華な着物はもんべに取って代われ、都会の人々は食料と交換せざるをえなかった。空襲による焼失という最悪の最期を迎えた着物も数知れない。

敗戦を経て、旧来の着物を着ることができるようになっても、日本人の衣生活は着物に戻ることはなく、洋服が日常着の地位についた。着物は高級な趣味となり、衣生活における地位を急速に失っていった。大正時代には洋服の着用者が「モボ・モガ（モダンボーイ・モダンガール）」と呼ばれて新奇な視線を浴びていたが、それから100年たたずに洋服と着物の地位は逆転したのである。

これについてはいくつかの考察があるが、戦争直後はミシンによる洋裁が戦争未亡人の生活を支える手段となり、洋裁学校が普及したこと、経済成長期に着物業界が高額な正装や外出着を販売する戦略を取ったこと、着付け学院の普及で着付けや決まりごとがマニュアル化され、そこから外れることを敬遠されたり非難されたりする風潮になっていったこと、などが主な要因としてあげられる。

改めて衣生活の変遷を通史的にみると、日本人とくに女性が着物を着なくなっ

たのは戦後であり、まだ100年にも満たないのである。しかしながら現在では、着物で外出すると、老若男女から好奇の視線を向けられるほど珍しいことになっている。

国立民族学博物館の開館40周年特別展「太陽の塔からみんぱくへー70年万博収集資料」(2018年)の日本についての展示では、1960年代の農業について「空前の大変化」とであると位置づけている。ものによっては弥生時代の出土品と比べてもあまり変化がなかった農具が、この時代に姿を消したり、機械に取って代わられたりした⁷。衣生活においても状況は類似する。風俗がいつも簡単に変化すること、前時代の生活感覚がいつも簡単に忘却されることに驚嘆を禁じ得ない。

2-2. 現在の着物

現在、大半の日本人にとって着物は日常着ではないが、一時期の停滞を経てファッションの嗜好の一分野としての地位を回復しつつあるように感じる。正統的とされる内容で高級志向な『美しいキモノ』(ハースト婦人画報社、1953年創刊、季刊)、カジュアルな内容の『七緒』(プレジデント社、2004年創刊、季刊)といった異なる嗜好ごとの複数の定期刊行物、『KIMONO 姫』(祥伝社ムック、2003年創刊)のような若年層向けの個性的な着方を提案する刊行物が出版されている。経済成長期に高級志向となった傾向の反動といおうか、普段着むけの木綿も見直され、伊勢・会津・片貝などの木綿が多く販売されている。また、着付け学院が指導するマニュアル以外にも、自分の好みや便宜を取り入れた着方を提案する発信者も数多い⁸。

こうした状況を見ると、マジョリティではないというだけで、着物は日本人の衣生活の一部にしっかりと根を下ろし続けていると感じられる。この点は琉装とは大きな相違である。着付けが煩雑で夏場は快適とは言い難い着物の、上記のような現状をみると、本来は気候に合い、着付けも簡単な琉装がファッションとしての選択肢からはほぼ脱落している現状が、不条理であり不可思議にも感じられる。

3. 植民地時代とグローバリズムと民族衣装の諸相

現代では西洋式の衣装(洋服)が多くの地域で多くの人々に着用され、いわば

世界服というべき地位を占めている。この現状にいたる過程は、地域や民族によってさまざまであった。近代の植民地や帝国主義に伴って、支配者側の衣生活文化が世界に広まっていった。その過程の考察はロス [2016] に詳しいが、西洋式の衣装に対する「民族衣装」という語彙・イメージは、ここから生まれたといえよう。

ここでは中国、台湾や香港および各地の華僑が着用する旗袍（「チャイナドレス」）、シンガポールとバリ島のクバヤ、インドのサリーを中心に、先行の研究成果から事例を概観したい。1・2でみた沖縄・日本の内容とも共通するが、すべて女性の衣服であるという点でジェンダーの面に偏りがあることを確認したうえで、今回はこの問題は措くことにする。

上記の三例は、いずれも近代の植民地主義やその後のグローバル化によって誕生した事例である。バリ島のクバヤのように「植民地によって誕生した」と明言できる事例もあれば、旗袍のように古来の衣装が近代以降に変遷をたどって現在の形になった事例もある。

3-1. インドとサリー

インドの衣装サリーは、日本において一般的によく知られた民族衣装である。つまり、名前だけで多くの人が頭の中にイメージを描くことができるであろう。サリーやインドの衣文化については日本語で読むことができる研究成果は多く、この章でとりあげた衣文化の中ではとくに充実しているという印象を受ける。

サリーはインドの衣装のひとつの形式である。他にはパンジャビ・ドレスと呼ばれる、丈が長いワンピースの下衣にズボンを用い、ドゥパッタと呼ばれるショールをかける形式の衣装、ヘレンガと呼ばれる、ぴったりした上衣に丈が長いスカートを合わせる形式などがある。南インドでは未婚女性が着用するハーフ・サリーと呼ばれるサリーの一種があり、ナガランド州、ラダック地方などアーリア系のインド文化とは異なる文化を持つ地域、



図版(5) サリーの下にヴィクトリア朝風のブラウスを着用した婦人：国立民族学博物館『装うインドーインドサリーの世界』2005年、p69

キリスト教文化が優勢なゴア州では、それぞれのグループに独自の衣装がある。

サリーといえば「インド女性の伝統的衣装」といったような紹介がなされることが多いが、その形式は不易流行ではない。縫製しない一枚布をまとうことは、インドの多くの地域で続けられてきた衣生活であったが、巻き方や布の素材・装飾などは多種多様であった。現在はインド全土や他地域からの影響により、サリーにも他の衣装にも次々と新しい流行が生み出されている [上羽：2015]。

イギリス植民地時代は下層カースト女性の上半身への着用の普及、ヴィクトリア朝風着付けの流行などさまざまな変遷がおこった⁹。

衣服やそれに関わる手仕事を政治的な表現としたのは、よく知られるようにガンディーである。スワデーシー(インド産品愛用)運動を主戦略のひとつとし、カーディー(インド産の手紡ぎ手織り綿布)のドーティ(男性用の腰巻状の下衣)のみを、政治的な意図をもって着用した。この姿で自ら糸車(チャルカ)を回す姿は有名な肖像写真となっている。

植民地時代以前、インドは多数の藩王国からなっており、民族も多様で、「インド人」の象徴となるようなイメージは存在しなかった。ガンディーは植民地支配からの独立と民族の団結の象徴となる「インド人」の衣装として、サリーや男性のドーティーを押し上げたのである。

インドの女性は現在でも民族衣装を着用している割合が高く¹⁰、世界中どこに行っても着用する傾向があるという [山田・小磯 2019：p.79]。一枚布という形状と着付けは変わらないものの、素材や装飾などは流行があり、目まぐるしく変わるという [杉本 2009]。この点は、大正から昭和戦前期の着物にも似た現象である。「伝統衣装」の「最新流行」とは、矛盾するようにも感じられる表現であるが、サリーについてはそれが現状ということであろう。

3-2. 中国と「チャイナドレス」

「チャイナドレス」について日本語で読むことができる研究は、主として謝黎氏による成果である [謝 2004・2011・2020]。また、2017年に関西大学博物館で行われた「装いの上海モダン—近代中国女性の服飾—」は、広岡今日子氏の個人コレクションによるものであったが、大変好評であったという(図録が完売して入手が困難であった)。日本人の「チャイナドレス」に対する知名度と関心は一定の高

さを保っているということができよう。

しかし、関心の高さと実態についての知識は同じものではない。日本では「チャイナドレス」と呼ばれる中国の女性用衣装・旗袍については、現在は日本を含め世界の多くの人々が、中国を代表する女性の民族衣装であるというイメージを抱いている。

実際には、現在の「チャイナドレス」の形が成立したのは清朝滅亡後、中華民国時代の1920年代である。中国のマジョリティである漢民族の衣装は上衣下裳と呼ばれる二部式で、日本人には着物に似ているように見える合わせ襟のゆったりした上衣に、これもゆったりとしたスカートをあわせる形式であった。

旗袍の原型となったのは、清朝の支配階級であった満州族のワンピース型衣装であるという説と、男性の日常着であった長袍（長衫）という説、両者の折衷とする説がある。前開きの直線立ちの衣装を、身体に巻き付けるという旗袍の基本的構造は、ワンピースやコートの形式となって洋服の影響を受けながら成立した。

初期には女学生やモダンガールなどの、西洋的教養を持つ新しい時代の女性のシンボルの服装であったという点は、日本の女学生の袴姿や初期の洋服に近いものがある。義和団事変（1900年）の際の口碑「西洋かぶれのあま」¹¹には、中国の民衆や文化を裏切る存在として、断髪にぴっちりした旗袍を着た若い女性が登場する。この話からは旗袍がもつ新しさや西洋の影響を、マイナスイメージをもって受け止めた層もあったことが分かる。

共和制の誕生という新時代とともに誕生した旗袍は、1930年代に最盛期を迎えた。モダンで西洋的な上海、古典的な北京の両形式を中心に頻繁に流行が変わっていったが、直線裁ちに紐ボタンという伝統的な形式は、時代が下るにつれて立体裁断など洋服の特徴が顕著になっていく。



図版（6）1910年代の中国女性のコーディネート。「チャイナドレス」の原型であるが、現在の形とはかなり異なる（広岡[監修]: 2017、p17)

1949年に中華人民共和国が成立すると、旗袍のモードの中心は香港に移った。洋裁の素材や技術を取り入れ、実用的な旗袍が好まれた。中国本土では、文化大革命の時代は旗袍も糾弾の対象となって肅清され、日常着の地位を失った。香港では1960年代に入り、身体にぴったりした現在の「チャイナドレス」のスタイルが流行し、老いも若きも日常的に着用する衣服ではなくなっていった[謝：2004、2011、2020 および広岡 2017]。

「チャイナドレス」の深いスリットは、もとは騎馬民族である満州人が乗馬するときのためのもの、タイトで身体のラインを浮かび上がらせるスタイルは洋服の影響によるものであるが、現在では女性の身体的魅力を強調する特色と受け取られることが多い。日本で入手することは「民族衣装」の中では比較的容易であるが、古風な旗袍は基本的にアンティークであり、日常着として着用が可能なものは、かえって入手が難しい。

3-2. 韓国とハンボク

韓国の民族衣装は、日本では「チマ・チョゴリ」と呼ばれることが多い。間違っているのではないが、「チマ」は女性の裳、「チョゴリ」は男女ともに上半身の表着を指すので、女性の衣装に限定される。韓国では「ハンボク（韓服）」、朝鮮民主主義人民共和国では「朝鮮服」と呼ばれている。ここでは「ハンボク」の呼び名を採用するが、対象とするのは特記しない限り、女性用のいわゆるチマ・チョゴリである。

ハンボクは李氏朝鮮時代の18世紀に、現在に近い形式が出来上がった。日本統治時代には同化政策で迫害されたこともあったが、朝鮮戦争後まで日常着の地位を保っていた。

現在は他の地域の民族衣装と同様、日常着として着用する人はごく少数であるが、ハンボクの着付けは和服のような煩雑さがなく手伝ってか、ハレの衣装としては盛んに着用されている。

19世紀に洋服が知られるようになって以来、足元まである長いチマを短くしたり、チョゴリの結び紐であるコルムではなくボタンやブローチを用いたり、洋服の形や洋裁の技術を部分的に導入したりしたハンボクが「改良韓服」「生活韓服」と呼ばれて普及している。

この形式は在日コリアンの中にも普及している。普及というよりも在日コリア

ンの文化的特徴として独自の進化をしているといってもよさそうである。

例えば、朝鮮総連傘下の朝鮮学校は、女子の制服としてハンボクを採用している。色彩や布地やひだスカートは日本の学生服と共通するが、チョゴリの短い身丈や長いコラム（結び紐）、長いスカート（チマ）は民族衣装の特色を強く印象づける。

このチマ・チョゴリ制服は極めてユニークな存在であるが、この制服を街中でみかけることは、現在はほとんど皆無である。1990年代末ごろから、民族差別感情による朝鮮学校の女子生徒への暴力事件が相次ぎ、通学時にはハンボク形式ではないブレザーの制服が用いられるようになったからである [そんい・じゅごん 2016 : p31 ~ 33]。

この状況の当事者であるそんい・じゅごん氏の著書『きゃわチョゴリー軽やかにまとう自由』は、「着るもの」と人のアイデンティティやエスニシティ、歴史や社会状況が、個人の中に併存していることを実感させる。正確に言えば、時に労力や犠牲を払いながら、共存させられているというべきであろう。

著者のそんい氏は在日コリアン3世で、幼稚園から大学までを朝鮮学校で過ごした。中学校時代、チマ・チョゴリ制服を口実とした民族差別による暴力に逢い、ハンボクに対して複雑な気持ちを抱えることになった。さまざまな出会いからその体験を昇華させ、現在は自身のハンボクのブランド「そんいチョゴリ」のデザイナーとして活躍されている。

在日外国人は、ルーツとなる国の内部とは異なるプレッシャーを背負わざるをえない。その表出に、「民族衣装」も重要な位置を占めていることがわかる。沖縄は「外国」ではないが、文化のルーツが現在の日本のマジョリティと異なるという点では共通する部分がある。



図版（7）きゃわチョゴリの一例（そんい・じゅごん [2016] 裏表紙）生地オーガンジーなどを用い、赤いオーバースカートを取るとミニ丈のチマ（図版左）。素足にコッシン（ハンボク用の靴）、ショートカットなどそんい氏らしいコーディネート。

3-3. シンガポールのニョニャ文化、バリ島とクバヤ

女性用上衣クバヤは、シンガポールにおいてもマレーシアにおいても、インドネシアのバリ島においても植民地時代とともに誕生した。シンガポールにおいては、プラナカンと呼ばれる複数のルーツをもつ中国系の民族グループの女性の衣装である。16世紀から18世紀には、植民地やそれ以前の商業を通じたルーツで流入した衣装の形式を折衷して誕生した。植民地時代を通して、プラナカン女性（ニョニャ）の日常衣であり、アイデンティティの表現でもあった [松濤美術館：2016]。

インドネシアのバリ島において、古来の衣装は上下とも一枚布であり、上半身には何も着けないこともあった。オランダ植民地となった1930年代以降、「最後の楽園」というキャッチコピーと共に上半身裸体の女性のイメージが写真によって広まり、ヨーロッパからの観光客をひきつけた。さらにキリスト教的価値観もあり、植民地政府の指揮でクバヤが普及した。西欧の価値観により、政治によって着衣が普及する事情は、オセアニアなどの地域でもみられる。現在のバリの女性の正装は上半身が洋服の技術である立体裁断を用いたクバヤ、下半身は一枚布を巻きつけるカインという古来の形である。

クバヤがバリ女性の服装として定着して以来、形や素材は流行が目まぐるしく変わっている。筆者はバリ舞踊を趣味としているが、舞台衣装としてのクバヤを着る場合、流行遅れのクバヤでは他の踊り手から浮いてしまうので着用することができない。バリの女性は、もとは外来の文化発祥のクバヤを、すっかり自家薬籠中のものとして楽しんでいようである [武居 2018]。



図版(8) クバヤを着てバリ舞踊(チョンドン)を踊る筆者

3-4. アジア諸地域の民族衣装と洋服の文化

この章の内容は一見すると沖縄文化とは無関係のようであるが、現代沖縄の衣文化を俯瞰的にみるために必要と考えている。すなわち、洋服文化以前の衣文化の現在のありかたが、地域によって以下のようなさまざまな現象をおこし

ていることが分かる。

一つ目は近代以前とほぼ同様に、日常着の地位を保全している場合がある。インドのサリーがこれにあたる。二つ目は洋服文化と混交し、独特の進化をとげた場合で、「チャイナドレス」や東南アジアのクバヤがこれにあたる。三つ目はほぼ絶滅し、洋服にとって代わられている場合である。着物や琉装は、どちらかといえればこれに当てはまる。

植民地主義に抗して、民族衣装の着用を法律で義務化する事例もみられる。プータンはこの点で有名であるし、朝鮮民主主義人民共和国では、1970年代に金日成が「すべての女性はチマ・チョゴリを着ること」という指示を出して実行された時期があったという¹²。

日本の朝鮮総連傘下の朝鮮学校では、現在も女生徒のみチマ・チョゴリが制服として採用され、女性教員の多くも好みの色柄のチマ・チョゴリを着用している。着用者たちの胸中は様々であろうが、各々のエスニック・アイデンティティの発露としてチマ・チョゴリを位置付けている場合が多いようである[そんい・じゅごん 2016]。

また、これも沖縄を含む多くの地域に共通することであるが、支配者層の衣服は学校教育や政治を通じて浸透され、男性が早く、女性は遅れて普及するという傾向がある。植民地支配は、ジェンダーに如実に投影されることの事例の一つとなろう。

筆者は中学時代からの民族衣装好きであり、それはファッションとしての自己表現というよりも、単純に好きなものを身に着きたいという気持ちである。いつの時代でも同様の嗜好の持ち主は存在したであろうが、近年はそれを許容する風潮が高まっているのではないかと感じる。

民族衣装を工芸品や資料ではなく、ファッションアイテムのひとつとして位置付ける見方は、森明美『カワイく着こなすアジアの民族衣装』（河出書房新社、2004年）、主婦の友社『都会で着こなす世界の民族衣装』（主婦の友社、2019年）などの書籍にみることができる。とくに後者は、現在の流行に合った洋服や小間物との調和を志向している点で、民俗や工芸としての視点とはまったく異なる。研究成果ではないが、この視点を確認することは「民族衣装」の今日における意味を考えるさいに重要であると考えられる。

カジュアル着物の流行やカジュアルなドゥジンの提案は、そうした傾向と示し

合わせてはいないかもしれないが呼応しあっているように感じられる。この点は現時点では印象にすぎず、調査・考察は今後の課題である。

おわりに、展望

現代の社会において「民族衣装」とは何か、またどのような意味を持つのだろうか。佐藤若菜氏の中国のシャオ族における民族衣装についての論考[佐藤：2020]にみられるように、衣装を受け継いできた社会の内部においても、この問いは繰り返し提示されている。世界のほぼ大部分が同様の状況にあると考えてよからう。

この点を具体的に感じさせるのは、エスニック・アイデンティティを問わず、純粋にファッションの選択肢として「民族衣装」を選ぶ、という姿勢である。エスニック雑貨店の店頭ではもはや定着した光景ではあるが、前出の『都会で着こなす 世界の民族衣装』などの書籍においては目新しい衣服としてのみの視点で紹介される。あるいはインターネットの販売やフリーマーケット・アプリでは、雑貨店の店頭では販売されないような衣装を入手することも可能である。かくいう筆者も、ネットのフリマアプリで実店舗の店頭には並びにくいアフリカやパレスチナなどの地域の衣装を入手している。

上記のように、いっそ日本の歴史とは直接関係がない（ように見える）地域の衣装は、珍しい趣味であるというだけで心理的なハードルは少ない。しかし、ハンボクやアイヌ民族の衣装など、近代において日本が植民地とし同化政策を行った地域の衣装は、単なるファッションとみるのは躊躇される。特にハンボクは、日本においては極右の思想の持主から攻撃される可能性があるという点では、直接の危険を伴う。

着物を着れば「日本の伝統を受け継いでいる」とか「自分で着付けができる」といった点をほめられる。インドのドレスなどを着れば、個性的な趣味の持ち主と受け取られる。アフガニスタンやブルキナ・ファソなど、一般には馴染みがない民族衣装を着れば、「どこのどのような衣装か」と聞かれ、珍しそうに眺められる。そしてハンボクを着たいといえ、相手が日本人であれ韓国人であれ、独特な雰囲気を感じるのは筆者のみではあるまい。

着用しているのはすべて筆者であり、筆者自身は常に同じ人間であるつもりなのだが、着用する衣服によって全く異なるメッセージを発することになる。「民族衣装」の持つ独特の意味を、いやというほど実感してきた。

この違和感を沖縄の衣生活と重ねて考察した、現時点での結果が小論である。沖縄に関する部分をはじめ、筆者自身が足を運んで聞き取りをした成果はほとんど含まれず、研究書以外を多く含む文献の渉猟による考察であるから、机上の空論となる危険性を痛いほど感じる。また、筆者としては必要と考えてのことではあるが、沖縄とは直接の関係がない地域についても、文献に依って長々と論じた。衣生活は一つの地域についてでさえ膨大なテーマである。問題点も膨大であり、筆者の力量不足もあって、今回は触れられなかったことも多い。今後の課題が多く、それも研究の楽しみであると考えておくことにする。

関心と問題点をまとめた一心でこの場を拝借したが、今後の課題として、聞き取りを行うことを表明することでご容赦いただくほかはない。読者諸賢で情報を提供していただける方があれば、ぜひとも教を請いたい。他にもお気づきの点は、忌憚のないご教示をお願いしたい。

注

- 1 エリック・ボブズボウム、テレンス・レンジャー [編] 前川啓治・梶原景昭 [ほか訳] 『創られた伝統』文化人類学叢書、紀伊国屋書店、1992年
- 2 栗国恭子「ミシンをめぐる沖縄技術史」『しまたてい』81～84号、一般社団法人しまたて協会 2017年7月～2018年4月
- 3 知念ウシ『ウシがゆく 植民地主義を探検し、私をさがす旅』沖縄タイムス社、2010年、p53～58
- 4 『Limn（沖縄 ぐらしの雑記 [リム]）』2018年1月号、kilo 発行、p31
- 5 『Limn』2018年（前掲）p28 - 37、『おきなわいちば』vol68、2020年冬号、光文堂コミュニケーションズ発行、p53
- 6 着物警察については、片野ゆか『着物の国のはてな』集英社、2020年、によくまとめられている
- 7 特別展「太陽の塔からみんなくへー70年万博収集資料」図録、国立民族学博物館、

2018年：p29 - 31

- 8 例えば以下があげられる。
通崎陸美『天使突抜一丁目』淡交社、2002年
豆千代『豆千代の着物モダン』マーブルトロン、2004[2003]年
マングリエ真矢『パリジェンヌの着物はじめ』ダイヤモンド社、2005年
田中優子『きもの草紙』ちくま文庫、2010年
きくちいま『増補新版 ふだん着物わくわくアイデア帳』河出書房新社、2017[2008]年
- 9 押川文字「写真でみるサリー」[国立民族学博物館：2005]。植民地時代以前は、上位のカーストに属する人物の前では上半身に衣装をつけないことが礼儀とされていた
- 10 筆者は2011年春にタミルナードゥ州とウッタラプラデーシュ州の農村でホームステイする機会があったが、ほぼ全員が未婚女性はパンジャビ・ドレス、既婚女性はサリーを着用していた。例外は学校の制服程度である
- 11 牧田英二・加藤千代[編訳]『義和団民話集』平凡社東洋文庫、中国の口承文芸1、1973年、に収載
- 12 呂錦朱[著]足利利雄[解説]『「喜び組」に捧げた私の青春 北朝鮮少女日記』廣済堂出版、2003年

参考文献

- 伊波晋猷「琉球女人の被服」(1943年)『沖縄女性史』平凡社ライブラリーい14 - 2、2000年
上原栄子『辻の花 くるわのおんなたち』中公文庫、1984年
廣澤榮『黒髪と化粧の昭和史』岩波書店同時代ライブラリー 163、1993年
宮城文『八重山生活誌』沖縄タイムス社、1995[1972]年
波照間永吉『南島祭祀歌謡の研究』弧琉球叢書4、砂子屋書房、1999年
外間守善[校注]『おもろさうし』上・下 岩波文庫黄142 - 1・2、2000年
原田紀子『聞き書き 着物と日本人 つくる技、着る技』平凡社新書110、2001年
小谷汪之[編]『現代南アジア⑤社会・文化・ジェンダー』東京大学出版会、2003年
小泉和子『洋裁の時代 日本人の衣服革命』百の知恵双書、農文協、2004年
謝黎『チャイナドレスをまとう女性たち 旗袍にみる中国の近・現代』青弓社、2004年
国立民族学博物館[編]『装うインドーインド サリーの世界』千里文化財団、2005年

- 「あざみ屋・ミンサー記念事業」委員会[編]『ミンサー全書』南山舎、2009年
- 杉本星子『サリー！サリー！サリー！ インド・ファッションをフィールドワーク』風響社、2009年
- 増田美子[編]『日本衣服史』吉川弘文館、2010年
- 植木ちか子・寺田貴子・片岡淳『琉球・沖縄の衣生活概観——遺品の実態調査からみえてきたこと——』琉球大学教育学部織染研究室 沖縄庶民の装い展実行委員会、2010年
- 謝黎『チャイナドレスの文化史』青弓社、2011年
- 熊谷フサ子『手縫い職人のカンドころ・當舖正幸コレクション調査報告書』（私家版）2014年
- 上羽陽子『インド染織の現場 つくり手たちに学ぶ』フィールドワーク選書12、臨川書店、2015年
- ロバート・ロス[著]、平田雅博[訳]『洋服を着る近代 帝国の思惑と民族の選択』サピエンティア 42、法政大学出版局、2016年
- 鄭鴻生、天野健太郎[訳]『台湾少女、洋裁に会おう 母とミンシンの60年』紀伊国屋書店、2016年
- 『サロンクバヤ：シンガポール 麗しのスタイル つながりあう世界のプラナカンファッション』松濤美術館、2016年
- 田中敦子[編著]主婦の友社[監修]『主婦の友100年 きもの宝典——きもの花咲くころ、再び』主婦の友社、2016年
- そんい・じゅごん[著]・早川道生[写真]『きゃわちょゴリ—軽やかにまとう自由』トランスビュー、2016年
- 井上雅人『洋裁文化と日本のファッション』青弓社、2017年
- 広岡今日子[監修]『装いの上海モダン——近代中国女性の服飾——』関西学院大学博物館、2017年
- 名古屋市博物館企画展『採録 名古屋の衣生活 伝えたい記憶 残したい心』2017年
- 武居郁子『バリ島服飾文化図鑑』亥辰社、2018年
- 文化学園服飾博物館[編著]『世界の民族衣装図鑑 約500点の写真で見る衣服の歴史と文化』ラトルズ、2019年
- 山田孝子・小磯千尋[編]『文化が織りなす世界の装い』シリーズ比較文化への誘い4、英明企画編集、2019年
- 謝黎『チャイナドレス大全 文化・歴史・思想』青弓社、2020年

佐藤若菜『衣装と生きる女性たち——ミャオ族の物質文化と母娘関係』京都大学出版会、
2020年

『目の眼』No. 523「世界を魅了する KIMONO の美」2020年4月、株式会社目の眼
『芸術新潮』2010年5月号、新潮社

東京国立博物館、朝日新聞社[編]『特別展 きもの KIMONO』2020年

熊谷フサ子『手縫い文化の探求 和服から琉服へのリメイク／うんしん・並縫いで作れる
琉服 今・時・ウチナーチン』熊谷和・琉裁きもの専門学院 沖縄和服琉服仕立協同組合、
2020年

上羽陽子・山崎明子『現代手芸考 ものづくりの意味を問い直す』2020、フィルムアート社

